
雨の日はキミの色

青りんご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の日はキミの色

【著者名】

N7055E

【作者名】

青りんご

【あらすじ】

大雨の日、私は傘もささずに道に立っていた。アイツは、いくら
まつてもこなかつた・・・。

じまとまと、私は雨に濡れたコンクリートの上を歩いた。本当な

*

叫ぶ声は、虚しく雨音でかき消された。

「ありえない・・・!」

私、あまのみわ雨野未環は、今日とても運が悪いそうです・・・。天気予報には裏切られるわ、アイツには裏切られるわ・・・。最ッ悪。
せっかくの一日一コ一の服だつて、傘を持つていない私に容赦なく降り注ぐ冷たい雨のせいでのつびしそびしよ。

「天気予報では晴れつていってたのにーしかもアイツ、こないじやん!」

ぱつり、ぱつりと地面を打つ音が、人込みに紛れて鳴つてゐる。今日は生憎の雨。水溜りが、あちいらこぢらにできている。そんな中、私だけ、どうしてこんなに悲しく虚しく胸が痛んでいるのだろう。・・。あつと、原因は、この天気。

ら、今頃一人でテートだったハズなのに。どうして今私は一人なのだろう。

アイツは結局、私の事なんて好きでもなんでもなかつたんだ。私が想いを寄せていた。なんかもつ、”恋”なんてどうでもよくなってきた。

「はあ・・・」

と、私が溜息を漏らすと、それとほぼ同時に、携帯の着メロが鳴つた。きっとアイツからだ。携帯の内容は、こうだつた。

【オレ、やっぱ無理。】

それだけ。9文字だけで別れを告げられた。

“やっぱ無理”って何よ！バカ！

携帯に向かつて起こる私を、道行く人々は、冷たい目で見ていた。私は、悲しい気持ちから、悔しい気持ちへと変わつていくのを、ちゃんと心で感じていた。

涙は出なかつた。・・・ううん、嘘。ほんとは傘を持つてなかつたおかげで雨が顔にも当たり、涙を隠せただけだつた。

「ううううう」

嗚咽は漏れるばかり。止まらない。もう・・・・・恋なんかしな

い。

「大丈夫？」

その声と共に、さつさまで当たつていていた雨が、ぴたりとやんだ。

「あーあー・・・びっしょびしょじやん。風邪引くよ?」

田を上げると、男の人が、傘を私にさしてくれていた。泣いてるの、バレたかな・・・。

「とりあえず、うち、すぐそこ」のカフェだから、着替えていきなよ」

カフエ・・・?あ・・・ほんとだ。あんなに田立つといふの・・・。

「う・・・ん・・・」

全然知らない人だったけど、もつひとつでもよかつた。丁度、なんか寒くなつてきてた頃だし、丁度いい。

中に入ると、洋風でオシャレな感じの店内だった。

「いらっしゃ・・・」

店員さんは、私を見て、「大変!」と言いつつ、バタバタと階段を上がつていった。

「う、一回が生活スペースだから。」

「・・・」

彼はそうこうと、カバンの中からタオルを取り出し、私に渡してきました。

「まだ一回も使ってないから、安心して。」

私はこくりと頷いて、そのタオルで髪や顔を拭いた。そういうじるじると、一回からさつきの人が降りてきた。

綺麗な女人。

「姉ちゃん。この子傘ささないで歩いてたから、拾つてきた。」

お姉ちゃん？…うりやましい…。って、それよりも…。拾つてきたって。私は捨て犬か！

「大丈夫？ずぶ濡れのままだと風邪引くから、とりあえず着替えて。この服、私のだから。」

「あ…。はい。ありが…。ふえっくしゅんっ！」

「…。さむッ！…！」

「もう風邪引こちゃってるね…。」

私を拾つた彼が言つた。

*

「はー。これ、風邪薬。これ飲んで、ゆっくり寝るのよ。」

「わかつてゐるよ。」

私は、家まで彼……真野君^{まの}に送つてしまひ、今は自分の部屋でママに渡された薬を飲んでこらへる。

「ヒュウ……あんた、あの男の子誰よ？ 池矢君^{いけや}とせびつなつたの？」

「……ママに関係ない」

池矢……夢灯^{ゆめひ}。私のこう、”アイツ”のことだ。……思に出したくなかったのに。思い出したら涙^{なみだ}がまた零れてしまつから……。なのに……ママのばか……！

「とにかく、安静にしておなさい。」

ママはもう二つと、ぱたんとドアを開め、部屋から出て行った。

「夢灯……。」

ぽろぽろと涙が溢れる。さきまで、おれられていたの。ずっと真野君^{まの}とじべっていたからかな？ 忘れることができていた。

「ううう」

ふるふるふるふる・・・・・・・・

「？」

電話の着信だつた。メールではない。
一体、こんな時間に誰・・・?

『はい、もしもし・・・』

『あつー未環ーー』

・・・誰?私の名前、呼び捨てだし・・・。

『あの・・・誰ですか?』

『オレだよオレー!真野ひのきー!』

真野君?!

『なんで・・・』

私の電話番号知ってるの・・・?と聞いつとして、やめた。そういう
えば、私が着替てる間に、番号交換しつくつて言つてたことを思
い出したから。

『未環、今泣いてただろ。』

『な・・・泣いてない!』

なんだこの男は。私が泣いてたとなぜ分かる・・・。

『未環つて結構泣き虫?』

『そんなことないー今日は夢灯にー・・・あつ』

『夢灯?』

やばい・・・。ていうか・・・私、フランクなんていえないし・・・。
私がそういうと、電話越しに聞こえていた声が、ピタリとやんだ。

そして、しばらくしてから、また声が聞こえた。

『なんでもないー気にしないでー。』

『気にするよ。』

え・・・。何それ。なんか今心にじきんつてきた!

『だつて未環が泣いてた理由が、その夢灯とかいうやつのせいな
んだろう? 気になるに決まってる・・・』

わ・・・。ダメだ。また涙止まらない。心・・・もたないや・・・。

『「めん。いえない。まだ真野君のこと知らないし・・・。もっ
とお互い知つたら・・・教えるよ』

そう。今の時点では、真野君とはあかの他人同然。今日一日一緒に

何が分かるって言うの？

『何言つてんの。もつオレは未環のことを知つてゐるし、未環だつてオレのことを知つてゐる。』

〔三〕

『未環は泣き虫。それはガラスの心を持つてるから。』

ガラスの心

『未環はオレのこと、もう知ってるよね?』

眞野君の「JEL」は、どうして「JEL」の際適正でないか。

真野君は、優しい。

『よくでしゃがつた!』

真野君は、傍にいたらきつと頭を撫でるだらうなくらいの勢いで、言葉を発した。

真野君と話す二十七
私は……いのまにか、涙かヒタリとやん
でいた。

『真野君・・・聞いてくれる?』

『何何？何の話？！』

『さつき言いかけてた・・・夢灯のこと。』

今ならいえる気がした。

『私、夢灯が大好きだったの。幼馴染でね・・・』

私は、ゆづくつと、ぽつ、ぽつ、雨が降るよつに話した。

『私、夢灯と付き合ひたことになつて、本当に幸せだった。でもね、夢灯は私に恋愛感情を抱いてなかつた。』

やづ。恋をしてたのは、私だけだったの。

『で、今日あつた別れを告げられたつてワケ。』

明るく、振舞う。涙を隠し、つらい気持ちを押し殺す。

『そつか・・・だから泣いてたんだ。』

『・・・』

『今、また泣いてるだろ』

『やんねーん!泣いてません!私は泣き虫ではないのです!』

明るく・・・明るくしなきや。今日は泣きたかった。だから、もう泣かない。

『ふーん・・・心はさみと今頃大雨だひばじな』

『ツ・・・・』

全部・・・バレバレかあ・・・。

『ねえ。』

『何?』

『私ね、ほんとほさつと泣いていたかった。』

思い切り、枯れ果ててしまひへりここまで。

『わつと、爾の口になると、絶対に夢灯を思い出して悲しい気持
ちになる。』

もう恋などしないと思ひへりここまで。

『だナジ、爾の口は真野都と出合えた口つて思つたら、疾なんか
出なかつた。』

特別な、記念日。

『もう泣かなつよー。』

絶対に。

『ああ。』

返答は、それだけだった。

*

それから、数日後。また、雨が降る。だけど、今日は濡れないよ。
だって、隣に傘をさしてくれる、愛しい人がいるから。

『真野君と出合えてよかつたよー。』

『オレもー。』

その日の晩は、とても優しい雨でした。

(後書き)

最後まで見てください、ありがとうございました。
また次の小説も、見てくださいますとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7055e/>

雨の日はキミの色

2010年12月18日18時13分発行